

【 復活のトロパリ 第7調 】

ハリスト スか みよ、なんぢ はじゅう じかに てしを  
 神 爾 十 字 架 死  
 ほろぼ し、と うぞく のた めに らくえんを ひ開  
 滅 盗 賊 の 爲 楽 園 開  
 ら き、けい こう ぢよの かなしみを なぐさ  
 攜 香 女 悲 慰  
 め、しとに なんぢが ふくか つして、せか 界  
 使 徒 爾 復 活 世 界  
 いにおお なる あわれみを たま いしを つたえ  
 大 憐 賜 傳  
 させたま えり。  
 給

【 日本の亜使徒聖ニコライのトロパリ 第4調 】

しととひとしく どうざな るもの、ちゅう  
 使 徒 等 同 座 者 忠  
 じつにして しんちなるハリスト スの えきしゃ、せい  
 實 神 智 役 者 聖  
 なるしんに えられた るふえ、ハリストスのあい  
 神 撰 笛 愛  
 にみちた るうつわ、わがくにのこう  
 満 器 我 國 光  
 しょ しゃ、あしとしゅきょうせい ニコライ  
 照 者 亜使徒主教 聖

よ、なんぢのぼくぐんのた め、および  
爾 羊 群 爲 及

ぜんせかいのた めに、いのちをたもうせい  
全世界 爲 生命 賜 聖

さんしゃにいのりたまえ。  
三者 祈 給

【 日本の亜使徒聖ニコライのコンダク 第4調 】

こうえいはちちとこ と せいしんにき  
光 榮 父 子 聖 神 歸

す、

せいせいしゃあしとせいニコラ イよ、わが  
成 聖 者 亞 使 徒 聖 我

くになんぢをたびびとおよびいほうじんとうけ  
國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受

しに、なんぢははじめわがくににおいておの  
爾 初 我 國 於 己

れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストスの  
外 來 者 知

ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて  
光 暖 流 爾 敵

きをぞくしんのことな し、かれらにか  
屬 神 子 爲 彼 等 神

みのおんちようをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて  
 恩寵 與 教 會 建  
 たり、いまこのきょうかいのためにいのり  
 今 此 教 會 爲 祈  
 たまえ、けだしわれらそのしよしはなん  
 給 蓋 我 等 其 諸 子 爾  
 ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ  
 呼 我 善 牧 者 慶  
 べよ。

【 復活のコンダク 第7調 】

いまもいつうもよよにい、アミン。  
 今 何 時 世 世  
 しのけんはすでにひとびとをとらうるあた  
 死 權 已 人 人 捕 能  
 わず、けだしハリストスはくだりてそのちか  
 蓋 降 力  
 からをやぶりてほろぼしたまえり。ぢご  
 敗 滅 給 地 獄  
 くはしばられ、よげんしゃはどうしんによろ  
 縛 預 言 者 同 心 喜  
 こびてよぶ、きゆうせいしゅはしんにおる  
 呼 救 世 主 信 居

ものにあられたり、しんじゃよ、ふく  
 者 現 信者 復  
 か つ して い で よ 。  
 活 出

司祭) ( 黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、  
 ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と  
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、  
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行なう者を棄てずして、其救の爲に痛悔  
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な  
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と  
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を  
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と  
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生  
 神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 )

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世  
 に、

アミン。

【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる  
 聖 神 聖 勇 毅 聖  
 じょうせいのものよ、われらをあわれめ  
 常 生 者 我 等 憐

よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれめよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれめよ。こうえいはちとことせいしんにきす、いまもいつもよよに、アミン。せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれめよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれめよ。

司祭) ( 黙誦：<sup>しゅ</sup>主の名に依りて來たる者<sup>な</sup>は崇<sup>よ</sup>め讃<sup>き</sup>めらる、ヘルヴィムに座<sup>もの</sup>する者よ、爾<sup>あが</sup>は其國<sup>ほ</sup>なんぢ<sup>もの</sup>そのくに

の光<sup>こう</sup>榮<sup>えい</sup>の寶<sup>ほう</sup>座<sup>ざ</sup>に在<sup>あ</sup>りて恒<sup>つね</sup>に崇<sup>あが</sup>め讃<sup>ほ</sup>めらる、<sup>いま</sup>今<sup>いつ</sup>も何<sup>よ</sup>時<sup>よ</sup>も世<sup>よ</sup>世<sup>よ</sup>に、 )

【 <sup>プロキメン</sup>提綱 主日第7調 】

司祭) <sup>つつし</sup> 慎 <sup>き</sup> みて聴くべし、<sup>しゅうじん</sup> 衆 <sup>へいあん</sup> 人に平安、

誦經) <sup>なんぢ</sup> 爾 <sup>しん</sup> の神にも、

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>しゅ</sup> プロキメン、<sup>そのたみ</sup> 主は其民に <sup>ちから</sup> 力を <sup>たま</sup> 賜い、<sup>しゅ</sup> 主は其民に <sup>へいあん</sup> 平安の <sup>ふく</sup> 福を <sup>くだ</sup> 降さん、

しゅ は その た み に ち か ら を た ま い 、 しゅ は  
主 其 民 力 賜 主  
その た み に へ い あ ん の ふ く を く だ  
其 民 平 安 福 降 だ  
さ ん。

誦經) <sup>かみ</sup> 神の <sup>しよし</sup> 諸子よ、<sup>しゅ</sup> 主に <sup>けん</sup> 獻ぜよ、<sup>こうえい</sup> 光榮と <sup>そんき</sup> 尊貴とを <sup>しゅ</sup> 主に <sup>けん</sup> 獻ぜよ、

しゅ は その た み に ち か ら を た ま い 、 しゅ は  
主 其 民 力 賜 主  
その た み に へ い あ ん の ふ く を く だ  
其 民 平 安 福 降 だ  
さ ん。

誦經) <sup>しゅ</sup> 主は其民に <sup>ちから</sup> 力を <sup>たま</sup> 賜い、

しゅ は その た み に へ い あ ん の ふ く を く 降  
主 其 民 平 安 福 降  
だ さ ん。

【 <sup>アポストロス</sup> 使徒經 181 端 コリント後書6章1~10節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒パウエルがコリンフ人に達する後書の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

誦經) 兄弟よ、我等は同労者として爾等に求む、神の恩寵を徒に受くる勿れ。蓋

言えるあり、納るべき時に我爾に聽き、救の日に爾を助けたりと。視よ、今は嘉く納る

べき時、視よ、今は救の日なり。我等何事に於ても躓を人に置かず、我が職の謗

を受けざらん爲なり。我等凡の事に於て己を神の役者と顯す、即多くの忍耐

に、患難に、窮乏に、困苦に、扑刑に、禁獄に、争亂に、勤勞に、徹醒に、禁食

に、潔淨に、知識に、恒忍に、仁慈に、聖神に、偽なき愛に、眞實の言に、神

の能に於てし、左右の手に義の武具を以てし、尊榮及び耻辱に、惡評及び令聞に

於てす、欺く者に似たれども、眞なり、知られざるに似たれども、知られ、死したるに似た

れども、視よ、生けるなり、罰を受くるに似たれども、死に付されず、憂うるに似たれども、常

に喜び、貧しきに似たれども、多くの者を富ませ、有るなきに似たれども、有らざるなし。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) わたしたちはまた、神と共に働く者として、あなたがたに勧める。神の恵みをいたずらに受けてはならない。神はこう言われる、「わたしは、恵みの時にあなたの願いを聞き入れ、救の日にあなたを助けた」。見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日である。この務がそしりを招かないために、わたしたちはどんな事にも、人につまづきを与えないようにし、かえって、あらゆる場合に、神の僕として、自分を人々にあらわしている。すなわち、極度の忍苦にも、患難にも、危機にも、行き詰まりにも、むち打たれることにも、入獄にも、騒乱にも、労苦にも、徹夜にも、飢餓にも、眞実と知識と寛容と、慈愛と聖霊と偽りのない愛と、眞理の言葉と神の力とにより、左右に持っている義の武器により、ほめられても、そしられても、惡評を受けても、好評を博しても、神の僕として自分をあらわしている。わたしたちは、人を惑わしているようであるが、しかも眞実であり、人に知られていないようであるが、認められ、死にかかっているようであるが、見よ、生きており、懲らしめられているようであるが、殺されず、悲しんでいるようであるが、常に喜んでおり、貧しいようであるが、多くの人を富ませ、何も持たないようであるが、すべての物を持っている。

\*\*\*\*\*

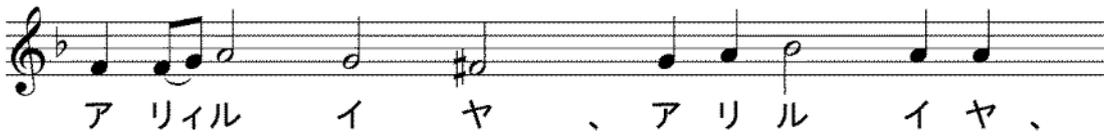
【 アリルイヤ 主日第7調 】

司祭) 爾に平安、

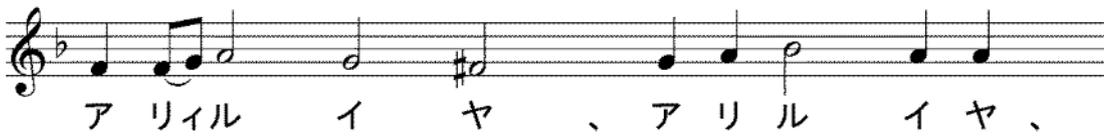
誦經) 爾の神にも、

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

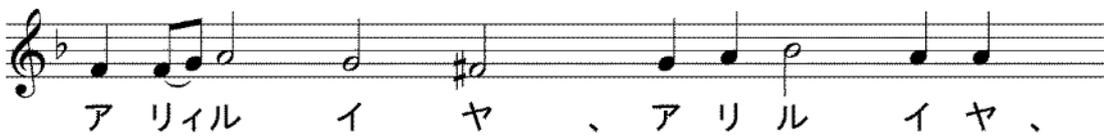
誦經) アリルイヤ、



誦經) <sup>しじょうしゃ</sup> 至上者よ、<sup>しゅさんえい</sup> 主を讚榮し、<sup>なんぢ</sup> 爾 <sup>な</sup> の名に <sup>うた</sup> 歌 <sup>び</sup> うは <sup>かな</sup> 美なる哉、



誦經) <sup>なんぢ</sup> 爾 <sup>あわれみ</sup> の 憐 <sup>あさ</sup> を朝に宣べ、<sup>なんぢ</sup> 爾 <sup>まこと</sup> の 眞 <sup>よ</sup> を夜に宣ぶるは <sup>び</sup> 美なる哉、



司祭) ( 黙誦: <sup>ひと</sup> 人を <sup>あい</sup> 愛する <sup>しゅさい</sup> 主宰よ、<sup>わ</sup> 我が <sup>こころ</sup> 心に <sup>かみ</sup> 神を知る <sup>し</sup> 智慧の <sup>ちえ</sup> 浄 <sup>いきぎよ</sup> き <sup>ひかり</sup> 光 <sup>かがや</sup> を <sup>わ</sup> 輝 <sup>し</sup> かし、<sup>わ</sup> 我が <sup>し</sup> 思

<sup>ねん</sup> 念の <sup>め</sup> 目を <sup>ひら</sup> 啓きて、<sup>なんぢ</sup> 爾 <sup>ふくいん</sup> が <sup>おしえ</sup> 福音の <sup>さと</sup> 教 <sup>たま</sup> を <sup>わ</sup> 悟らしめ <sup>うち</sup> 給え、<sup>なんぢ</sup> 我が <sup>ふく</sup> 衷に <sup>いましめ</sup> 爾 <sup>い</sup> の <sup>よるこ</sup> 福たる <sup>い</sup> 誠

<sup>おそ</sup> を <sup>おそれ</sup> 畏 <sup>い</sup> るる <sup>われら</sup> 畏 <sup>ことごと</sup> を <sup>にくたい</sup> も <sup>よく</sup> 入れて、<sup>ふ</sup> 我等 <sup>およ</sup> が <sup>なんぢ</sup> 悉 <sup>よるこ</sup> くの <sup>よるこ</sup> 肉 <sup>よるこ</sup> 體 <sup>よるこ</sup> の <sup>よるこ</sup> 慾 <sup>よるこ</sup> を <sup>よるこ</sup> 踏 <sup>よるこ</sup> み、<sup>よるこ</sup> 凡 <sup>よるこ</sup> そ <sup>よるこ</sup> 爾 <sup>よるこ</sup> の <sup>よるこ</sup> 喜 <sup>よるこ</sup> ぶ

<sup>ところ</sup> <sup>おも</sup> 所 <sup>か</sup> を <sup>おこな</sup> 思い <sup>ぞくしん</sup> 且 <sup>せい</sup> つ <sup>す</sup> 行 <sup>いた</sup> い <sup>たま</sup> て、<sup>けだし</sup> 屬 <sup>かみ</sup> 神 <sup>かみ</sup> の <sup>かみ</sup> 生 <sup>かみ</sup> 活 <sup>かみ</sup> を <sup>かみ</sup> 過 <sup>かみ</sup> ぐる <sup>かみ</sup> を <sup>かみ</sup> 致 <sup>かみ</sup> させ <sup>かみ</sup> 給 <sup>かみ</sup> え、<sup>かみ</sup> 蓋 <sup>かみ</sup> <sup>かみ</sup> ハ <sup>かみ</sup> リ <sup>かみ</sup> ス <sup>かみ</sup> ト <sup>かみ</sup> ス <sup>かみ</sup> 神

<sup>なんぢ</sup> よ、<sup>わ</sup> 爾 <sup>たましい</sup> は <sup>からだ</sup> 我が <sup>こうしょう</sup> 靈 <sup>われら</sup> と <sup>なんぢ</sup> 體 <sup>なんぢ</sup> と <sup>むげん</sup> の <sup>ちち</sup> 光 <sup>しせいしぜん</sup> 照 <sup>しせいしぜん</sup> な <sup>しせいしぜん</sup> り、<sup>しせいしぜん</sup> 我 <sup>しせいしぜん</sup> 等 <sup>しせいしぜん</sup> 爾 <sup>しせいしぜん</sup> と <sup>しせいしぜん</sup> 爾 <sup>しせいしぜん</sup> の <sup>しせいしぜん</sup> 無 <sup>しせいしぜん</sup> 原 <sup>しせいしぜん</sup> の <sup>しせいしぜん</sup> 父 <sup>しせいしぜん</sup> と <sup>しせいしぜん</sup> 至 <sup>しせいしぜん</sup> 聖 <sup>しせいしぜん</sup> 至 <sup>しせいしぜん</sup> 善 <sup>しせいしぜん</sup>

<sup>いのち</sup> に <sup>ほどこ</sup> して <sup>なんぢ</sup> 生命 <sup>しん</sup> を <sup>こうえい</sup> 施 <sup>けん</sup> す <sup>いま</sup> 爾 <sup>いつ</sup> の <sup>よよ</sup> 神 <sup>よよ</sup> と <sup>よよ</sup> に <sup>よよ</sup> 光 <sup>よよ</sup> 榮 <sup>よよ</sup> を <sup>よよ</sup> 獻 <sup>よよ</sup> ず、<sup>よよ</sup> 今 <sup>よよ</sup> も <sup>よよ</sup> 何 <sup>よよ</sup> 時 <sup>よよ</sup> も <sup>よよ</sup> 世 <sup>よよ</sup> 世 <sup>よよ</sup> に、<sup>よよ</sup> ア <sup>よよ</sup> ミ <sup>よよ</sup> ン。 )

【 エヴァンゲリオン 福音經 ルカ福音書 26 端 6 章 31~36 節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、主曰えり、人の爾等に行わんを欲する事は、爾等も是くの如く

これひとおこななんぢらもなんぢらあいものあいなんぢらなんかんしゃ  
之を人に行え。爾等若し爾等を愛する者を愛せば、爾等に何の感謝かあらん、

けだしざいにんらかれらあいものあいもなんぢらぜんおこなものぜんおこななんぢ  
蓋罪人等も彼等を愛する者を愛す。若し爾等に善を行う者に善を行わば、爾

らなんかんしゃけだしざいにんらかごとことおこなもかえのぞみもの  
等に何の感謝かあらん、蓋罪人等も是くの如き事を行う。若し返さる望ある者に

かなんぢらなんかんしゃけだしざいにんらすうごとかえためざいにんらか  
借さば、爾等に何の感謝かあらん、蓋罪人等も數の如く返されん爲に罪人等に借す

しかなんぢらてきあいなにのぞぜんおこなまたかあたすなわちなんぢ  
なり。然れども爾等敵を愛し、何をも望まずして善を行い、又借し與えよ、則爾

らむくいおおなんぢらしじょうしゃこなけだしかれおんそむものおよあもの  
等の賞は多からん、爾等至上者の子と爲らん、蓋彼は恩に負く者及び悪しき者に

じあいほどこゆえなんぢらじれんなんぢらちちじれんごと  
慈愛を施す。故に爾等慈憐なること、爾等の父の慈憐なるが如くなれ。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 人々にしてほしいと、あなたがたの望むことを、人々にもそのとおりにせよ。自分を愛してくれる者を愛したからとて、どれほどの手柄になろうか。罪人でさえ、自分を愛してくれる者を愛している。自分によくしてくれる者によくしたとて、どれほどの手柄になろうか。罪人でさえ、それくらいはしている。また返してもらおうつもりで貸したとて、どれほどの手柄になろうか。罪人でも、同じだけのものを返してもらおうとして、仲間に貸すのである。しかし、あなたがたは、敵を愛し、人によくしてやり、また何も当てにしないで貸してやれ。そうすれば受ける報いは大きく、あなたがたはいと高き者の子となるであろう。いと高き者は、恩を知らぬ者にも悪人にも、なさけ深いからである。あなたがたの父なる神が慈悲深いように、あなたがたも慈悲深い者となれ。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
 主 光 榮 爾 に き 歸 し、 光 榮

はなんぢにきす。  
 爾 に き 歸 す。

※ 聖体礼儀③（金ロイオン）へ